

残したい盛岡のお盆の風景

<盛岡のお盆行事> 8月14～16日

◆お盆迎え火・送り火

盛岡市内では昔から絶えることなく先祖のお盆行事として、各家々で、迎え火、送り火が行なわれてきました。戦前までは、町内で申し合わせをして、道路の中央で、一斉に束薪で焚かれてきました。しかし、戦後、人口流出、世代交代、車社会が進む中で、急速に減少していきます。また、道路上ではできなくなり、各家々の軒下で焚くことになります。このような中、鉾屋町界限では、夕方暗くなると14、15日の迎え火、16日の送り火が、町内で一斉に焚かれる風景を見ることができます。

◆黒川さんさ踊りの門付け

14日夜には、焚き火の中で、黒川さんさ踊りの門付けが行われます。
門付けは、鉾屋町のような街道筋の入口に発達した町場では町場と農村との交流の象徴として特に大切にされてきました。戦後の農地解放、その後の流通の近代化、旧市街地の衰退の中、農村との関わりが薄れ、道路の車優先化も相まって、昭和40年代以降、ほぼ消滅したと言って良い状態です。
伝統さんさは、お盆に神社等の境内で踊っていたものが、地域の家を回って供養する家周り、さらに踊り組が、盛岡城下の商家に門付けするようになります。「魅せる芸」として、厳しい修行に堪えた踊り連中が伝承を担ったため「連中参差（むらじさんさ）」とも呼ばれています。この連中参差のひとつが黒川さんさ踊りです。由来は、多くのさんさ踊りが三ツ石神社の悪鬼退散の祝いを由来とするのと異なり、平安後期・前九年の役での、関東武士の戦勝祈願の踊りから、家内安全、五穀豊穡の祈りをこめて踊り継いできたと伝えられています。高度な技術を要する古風色濃い踊りは伝統さんさの花形として部落の誇りとして大切に伝承されてきました。4人で組む「4つ踊り」など、ほかの踊り組にはない高度な組踊りを持ち、腰を低く保ちながら上体を捻り曲線で踊るダイナミックな至芸として県内外に多くのファンを得ています。
踊り組は太夫、唄かけ、太鼓打ち、笛吹き、道化役一八、踊り手、世話役で構成し、踊りは輪踊りが基本で、33種あったと伝えられ、提灯を持った太夫を先頭に「歩き太鼓」で入場、輪ができ「庭ならし」から始まり、「引き庭」で踊り収めます。

◆舟っこ流し

16日の精霊送り行事です。各町内会等で作られた造花や五色弊で飾られた舟を、火をつけて北上川に流し送る伝統行事で、その後、灯ろう流し、山梨県南部町由来の投げ松明、花火大会が行われます。
舟は各町内から子供たちによって町内周りをし、明治橋上流に集められ、儀式的あと有志がひいて一艘ずつ川へ流され、火をつけます。燃えながら流れる舟は明治橋で燃えつきます。
舟っこ流しは、享保年間に、盛岡藩四代藩主・南部行信の七女・麻久子姫が川施餓鬼（かわせがき）の大法要を行ったのが始まりとされています。その百年後、1815年に津志田遊郭の遊女たちが乗った舟が氾濫した北上川で転覆し、溺れ死んだ霊を慰めるため、舟に位牌と供物を乗せて流すようになり、以後盛んに行われるようになりました。今では祖先の霊を送り、無病息災を祈る行事となっています。

※開催情報詳細は「盛岡舟っこ流し公式サイト」をご確認ください。

引用元：特定非営利活動法人盛岡まち並み塾 ホームページ <https://www.machinamijuku.org/>



★岩手県盛岡市鉾屋町界限

江戸から明治期にかけて北上川舟運の起点、街道が交る要衝の地、城下の南の玄関口として栄えた地域です。現在も盛岡町家、舟運時代の土蔵、自然風土が育む緑と清水、寺院群などの歴史施設や街並みが残り、城下町の歴史風情とともに人々の暮らしが息づいています。盛岡の暮らし文化の歴史を伝える貴重な盛岡町家及び街並みと、人々の暮らしの営み、歳時記イベントなど、かけがえのない盛岡のまちの財産が守り繋がれています。



「大慈清水」と盛岡町家の街並み



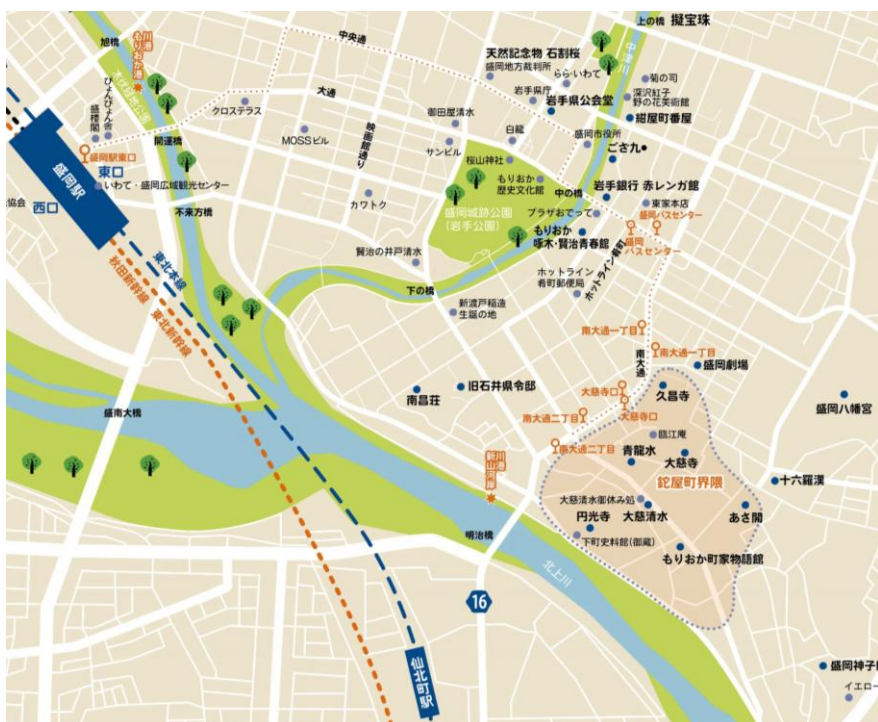
「御蔵・下町史料館」



「大慈寺」



「もりおか町家物語館」



【アクセス方法のご案内】

「盛岡駅」からはバスで約12分、または徒歩で約40分。「盛岡バスセンター」からはバスで約3分、または徒歩で約10分。

岩手県交通バス：盛岡駅東口13、14番乗場より「矢巾営業所」、「日詰駅前」行きに乗車、「南大通二丁目」バス停下車、徒歩3分。